

心像体験が原風景の自由記述の内容に及ぼす影響

Effects of imagery modality on content of free descriptions about one's original scenery

小 泉 晋 一

Shinichi KOIZUMI

概要

本研究では、290名の大学生を対象にして、心像体験が原風景の自由記述の内容に及ぼす影響を検討した。自由記述の内容を補足的な説明の記述の有無、感情の記述の有無、行為の記述の有無の3つに分類した。そして、心像の鮮明度や体験様式などの心像体験とこれらの記述の有無との関連をロジスティック回帰分析によって検討した。その結果、補足的な説明の有無は観察的心像と関連しており、行為の記述の有無は経験的心像と関連していることが明らかになった。また心像の鮮明度は、自由記述の内容には影響を与えないことも示された。原風景の報告は心像の体験様式によって大きく影響されるといえる。

キーワード：原風景、心像、心像の体験様式

Abstract

Effects of imagery experiences on the content of free description about a person's original scenery were examined. Participants were university students ($N=290$). Free descriptions about their original scenery were classified into three types, depending on supplementary explanations, descriptions about feelings, and descriptions about behaviors. Correlations between the vividness of imagery and modalities of mental imagery with the content of above descriptions were examined using logistic regression analysis. The results indicated that supplementary explanations were related to observational imagery, and descriptions about behaviors were related to experiential imagery. It was also indicated that the vividness of imagery did not affect the content of descriptions. It is concluded that reports of a person's original scenery are highly affected by modalities of mental imagery.

Keywords: *genfukei* (original scenery), imagery, modalities of mental imagery

目次

- 1 問題
- 2 方法
 - 2.1 調査協力者
 - 2.2 手続き
 - 2.2.1 調査内容
 - 2.2.2 原風景についての自由記述
 - 2.2.3 SD法による原風景の印象評定
 - 2.2.4 原風景の心像の鮮明度と体験様式
- 3 結果
 - 3.1 SD法による原風景の印象評定
 - 3.2 各質問項目の平均値と標準偏差
 - 3.3 原風景についての自由記述の分析
 - 3.4 自由記述の内容と心像体験との関連
 - 3.4.1 補足的な説明の記述
 - 3.4.2 感情の記述
 - 3.4.3 行動の記述
- 4 考察
 - 4.1 原風景の形成年齢
 - 4.2 SD法による原風景の印象評定
 - 4.3 心像体験が自由記述の内容に及ぼす影響
- 5 文献

1 問題

原風景とは、個人が幼少期の生活環境の中で体験した風景や情景のうち、その後の生活の中で何度も想起され、現在の心理過程に何らかの効果や意味を与えている心像（イメージ）のことである（星野・長谷川，1983）。原風景という言葉は、奥野（1972）が最初に用いたと考えられている（呉，2001）。奥野は、作家の内面に存在する原風景が、作家の作品を読み解くうえでの重要なキーワードになると論じた。原風景には、個人に固有のものもあれば、民族や風土に共通したものも存在する。原風景は作家の幼少期と思春期との間の時期に、その生育環境をとおして無意識のうちに形成され、深層意識の中に固着する。そして、後年になればなるほど不思議な懐かしさをともなって思い出される。これが作家の創作活動の源泉となり、作品に大きな影響を与える（奥野，1972）。

その後 1970 年代から 80 年代をとおして、原風景は文化人類学や農学、人文地理学、建築学などの立場から論じられた。これらの学問領域における原風景研究については、井上 (1995)、呉・南 (1998)、樋口 (2007) が詳細にレビューをしている。心理学の立場からは、最初に星野と長谷川が一連の研究を発表した (星野・長谷川, 1981, 1983, 1985; 長谷川・星野, 1982, 1984)。星野と長谷川の貢献は、質問紙調査を全国規模で実施して大量のデータを収集し、数量的・統計的分析を実施することで原風景の全体像を実証的に示したことである (樋口, 2007)。原風景を思い浮かべたときの感情を感情微分法 (Feeling Differential 法; FD 法) を用いて測定し、因子分析法によって原風景の因子構造を検討した。原風景に数量的・統計的分析を用いたアプローチは初めてであり、その意義は決して小さくない。

井上 (1995) は、調査対象を中高年層にも広げて質問紙調査を実施した。そして、一般的には小学生時代の原風景が最も多く、女性は中学生以前に一極化するが、男性は児童期と青年期とに二極化すると報告した。中高年層の男性の約 20% が、22 歳以降の原風景をあげた。井上によれば、若年層と中高年層とでは原風景のもつ意味が異なる。若年層にとっては、慌ただしい生活から逃れて自己を取り戻す一コマとしての性格が強いが、中高年層では懐かしい思い出の一コマとしての性格が強い。また、若年層では中高年層よりも生々しさが残っており、ポジティブな感情だけではなく、ネガティブな感情をも伴った両価的な感情が喚起されやすいと指摘した。

1990 年代後半になると、呉・南 (1998) が過去の原風景研究を整理して詳細に検討した。そして今後に残されている 6 つの研究課題を指摘して、原風景研究に新たな視点を提示した。この 6 つとは、①原風景がどのように想起されるかという視点が大切なこと、②環境・空間－感情体験－意味づけ・評価をセットにして全体を捉える必要があること、③個人の原風景ではなく「国民的原風景・地域的原風景」へのアプローチが課題であること、④大学生 (青年期) 以降の中高年層の調査が重要であること、⑤原風景を説明する理論構築が求められること、⑥「場所アイデンティティ」などの原風景と内容的に類似した領域との関連を明確にすることである。呉 (2001) はこれらの課題を踏まえて中高年層を対象にインタビューを行い、「語り」の内容を分析した。

呉 (2001) によれば、原風景についての「語り」は 3 つに分類できる。それは、「風景としての語り」「出来事としての語り」「評価としての語り」の 3 種類である。原風景は語りの内容からだけでなく、語り方からも分類可能である。原風景の「何を語るか」(内容) ではなく、原風景を「どのように語るか」(叙述様式) という視点から分類すると、原風景の語り方は 5 種類に分けられる。それは「風景回想タイプ」「行為叙述タイプ」「説明演説タイプ」「事実説明タイプ」「評価意味づけタイプ」の 5 つである。そして、原風景の語り方と心像の体験様式との間には共通点がある。

田嶋（1987）は、壺イメージ療法による臨床経験から、心像を用いた心理療法ではクライアントが喚起した心像の内容よりも、心像の体験様式が重要であると指摘した。すなわち、クライアントが何を心像化したかではなく、心像をどのように体験しているかが重要であると考えた。実際に治療が進行するにつれて、クライアントの心像の体験様式が、観察的心像（観察的イメージ）から経験的心像（体験的イメージ）へと変容する¹。この体験様式の変化が、治療の進行や治療効果と大きく関係している。ちなみに観察的心像とは、身体から遊離した視覚心像優位の体験様式である。それに対して、経験的心像とは身体を巻き込んでいて、身体とより深くつながった体験様式である（田嶋、1987）。

呉（2001）は、田嶋による心像の体験様式の分類と原風景の語り方の分類とを比較して、「風景回想タイプ」「行為叙述タイプ」「説明演説タイプ」の3つの語り方が経験的心像と類似しており、「事実説明タイプ」「評価意味づけタイプ」の2つが観察的心像と類似していると述べている。その理由は、前者の語り方がより身体を巻き込んでいて、ありありとした感情が体験されているからである。しかも、より深く心像場面に没入しているために、視覚心像と自己との体験距離が近くなっている。一方、後者の語り方は、心像を傍観者的に眺めており、視覚心像と自己との間に距離がある状態、あるいは心像が身体から遊離した状態である。原風景の語り手は、それぞれの語りの経験的モードと観察的モードとを行き来しながら、原風景に対する自分なりの構成や意味づけを行い、物語化していく。原風景を幼少期に形成された心像であると考えるのであれば（星野・長谷川、1983）、原風景を語るという行為の基盤には心像の体験様式が大きく関与しており、この心像の体験様式が原風景の語り方にも大きな影響を与えると推測される。

原風景を利用した臨床心理学的な研究も報告されている。樋口（2000）は、自己表現能力とコミュニケーション能力とを高めることを目的にして、大学の授業の中で原風景の描画を実施した。そして、この描画を素材にしてグループ内で話し合いをさせた。その結果、他者と自己との原風景との違いから新たな自己発見がもたらされるだけでなく、他者の内的世界に対する共感的な理解が促された。大学生が原風景について他者と語ることは、幼児期の単なる思い出を語ることにとどまらず、自分自身の原点と出自とを発見することにつながり、心の安らぎを見出す意義があると考えられた（樋口、2000）。

さらに樋口（2007）は、原風景を心理療法に適用した事例として、池田（2001）の事例報告を解説している。それは、不安神経症の主婦の面接過程を記録したもので、原風景の視点から症例が読み解かれた。このクライアントは、面接の初期から、故郷の金沢をしきりに思い出していた。金沢にはよい思い出がなく、心から嫌っていた。しかし面接が進行して、幼い頃の金沢の記憶が明確になるにつれて、当時の幸せであった記憶が蘇るようになった。故郷に対する意味づけにも変化が生じて内的世界が再構成されると、やがて症状が消失して、現実適応も良好になっていった。このクライアントにとって、金沢の景色

は原風景として心の中にあり、それは心の故郷としての機能をもって安らぎと活力とを与え、苦しい状況を支えてきたと考えられた（樋口，2007）。

長谷川・星野（1982）は、自律訓練法による自律性状態を利用して原風景に対する臨床心理学的なアプローチを試みている。自律訓練法による自律性状態は自己催眠の状態でもあり、覚醒状態よりも自己の深い内面が顕在化されやすいと考えられた。この研究では、二人の大学生を対象にしている。彼らは自律訓練法の標準練習をマスターして、瞑想練習の段階に進んでいた。まず彼らに自律訓練法を実施して、その状態の中で語られた原風景を逐語的に記録した。彼らは、非常にリラックスした状態で原風景を心像化して語った。その内容を検討すると、自律性状態では無意識的な内容が容易に言語化されるようになると考えられた。この研究では統制条件が設けられていないのだが、自律訓練法などによる一種のトランス状態を利用すると、通常の覚醒状態よりも意識の深い部分に接近することが可能になると思われる。そして、その状態で語られる原風景はより鮮明で、ありありとした感情をともなうと報告された。原風景の深層心理学的な機能を検討するためにも、自律訓練法などを利用した臨床心理学的な心像体験促進法を活用することが非常に有効であるといえよう（長谷川・星野，1982）。

原風景は子ども時代の生活空間の心像である。生活空間での感情体験をともなったさまざまな記憶が、この心像に結びついて原風景が形成される（樋口，2007）。今までの原風景研究では、筆記や口述による原風景の報告が求められてきた。研究協力者は、心像として心の中にある原風景を言語化する作業を行ってきたといえる。これら原風景の言語報告は、心像としての原風景の鮮明度や体験様式などの個人の心像体験に大きく影響されると考えられる。そこで本研究では、原風景の心像体験が原風景の自由記述の内容に及ぼす影響を検討し、原風景と心像体験との関連を考察する。

2 方法

2.1 調査協力者

大学の心理学関連の授業を利用して、約 70 名から約 90 名の集団に質問紙を実施することによってデータを収集した。調査協力者は 290 名である。290 名のうち男性が 158 名で、女性が 132 名であった。年齢は 18 歳から 25 歳までで、平均年齢は 20.00 歳 ($SD=1.18$) である。

2.2 手続き

2.2.1 調査内容

質問紙の内容は、(1) 原風景についての自由記述、(2) SD 法による原風景の印象評定、

(3) 原風景の形成年齢、(4) 原風景の心像の鮮明度、(5) 原風景の心像の体験様式の5つである。(1) の自由記述については、①補足的な説明の記述の有無、②感情の記述の有無、③行動の記述の有無の3つの側面から検討した。

原風景の自由記述を求める際に、長谷川・星野(1982)を参考にして「原風景とは、幼児期から青年期くらいまでの間に形成された風景、あるいは情景の記憶のことです。それは、大人になってからも心のなかに強く残り、ときどき思い出したり、イメージとして目に浮かんできたりします。」と説明した。そして、「目を閉じて、子どものころに見て、今でも印象に残っている風景を思い浮かべてみてください。そのときに、あなたはどのような風景を思い浮かべますか？その風景の様子や思い浮かべているときの気持ちなどについて、下の欄に自由に記入してください。」と文章によって教示した。

2.2.2 原風景についての自由記述

まず原風景の自由記述の中で、原風景に対して少しでもその風景を補足的に説明しようとした記述が認められるか否かを検討した。回答の中には、例えば「祖父母の家の庭や周りの道」というように、一文(1センテンス)だけしか記述されていない回答が多くみられた。このような回答の場合は、一文だけしか書かれていないので、補足的な説明の記述が無いと判断した。もしも「祖父母の家の庭や周りの道」の記述の後に、「赤とんぼが流れていて遠くに山々が見える」という記述があれば、回答者の思い浮かべている風景が、読み手にも伝わりやすくなる。このような回答には、補足的な説明の記述があると判断した。すなわち、この例のように、少しでも風景に対する補足的な説明が書かれている場合には、補足的な説明の記述があるとみなした。

また、「小さな川があってその周りにたくさんの田畑がある風景。とても気持ちが良い」という回答では、「とても気持ちが良い」の一文を補足的な説明の記述とみなすことができる。しかし、これは風景の説明ではなく感情の説明である。したがって、風景の補足的な説明は無いが、感情の記述があると判断した。同様に、例えば「小さいころに住んでいた家の裏山の風景。たくさんの木が生えていて、うっそうとしている。懐かしいような楽しいと言うよりは少し哀しい感じ」という記述では、「たくさんの木が生えていて、うっそうとしている」の箇所が風景の補足的な説明の記述であり、「懐かしいような楽しいと言うよりは少し哀しい感じ」は感情の記述とみなした。

次に、これら感情の記述の有無を検討した。そして、もしも感情の記述が有る場合には、その感情を肯定的感情、否定的感情、両価的感情の3つに分類した。例えば「自分の家からいつも見える風景が思い浮かびます。今は違う所に住んでいることもあり、とても懐かしい気持ちになります」という記述の場合は、「とても懐かしい気持ち」という言葉があるので、肯定的感情の記述があると判断した。また「玄関の前でお母さんが手をふっている。(略)このときお母さんと離れるのがいやで、不安だったのを覚えている」という

ような記述は、「不安だった」という感情が書かれているので、否定的感情に分類した。肯定的感情と否定的感情との両方が記述されており、これらの感情が入り混じっていると判断できる場合には、両価的感情に分類した。例えば、「近所の公園と普段一緒に遊んでいた友達が数名。(略) このときの気持ちは、ただ楽しいということと、時間がきたらバイバイしなきゃいけない寂しさ」という回答では、「楽しい」という気持ちと「寂しい」という気持ちとが記述されている。このような場合に、両価的感情に分類した。

最後に、行動の記述の有無を検討した。風景の中で回答者自身が何らかの行動をしていることが記述されていれば、行動の記述が有ると判断した。具体的には、「森の中。おじいちゃんと山の中で木を使って遊んだ」という回答では、「木を使って遊んだ」の部分を行動の記述とみなした。また「大きな川のそばで、空が青空と夕焼け空の間くらいにあるのを眺めている」という回答では、「眺めている」の部分を行動の記述とした²。このように、回答者自身が何らかの行動をしていることを示す記述が一つでも有れば、それを行動の記述とみなした。

2.2.3 SD 法による原風景の印象評定

原風景の印象評定は、「明るい—暗い」「興奮した—鎮静した」などの 29 項目の形容詞対を用意して、それぞれに対して 5 件法による評定を求めた。29 の形容詞対は、長谷川・星野 (1982) が原風景の感情微分法に使用した項目や、井上 (1995) が報告した原風景による感情の一覧を参考にして作成した。

2.2.4 原風景の心像の鮮明度と体験様式

原風景の心像の鮮明度は、長谷川 (1993) と同じ方法で測定した。すなわち「実際に経験しているのとまったく同じくらい明瞭で鮮明に感じられる」から「その対象について考えているというだけで何のイメージも感じられない」までの 5 段階による評定を求めた。原風景の心像の体験様式は、心像が観察的に体験されているのか、それとも経験的に体験されているのかをそれぞれ 5 件法によって評定した。この評定は、杉浦 (1996) と同じ方法で行った。そして、観察的心像の得点から経験的心像の得点を引くことで、どちらの心像が優位に体験されているかを検討した。得点が正の値であれば観察的心像が優位で、負の値であれば経験的心像が優位であるとみなした。

3 結果

3.1 SD 法による原風景の印象評定

SD 法による原風景の印象評定について探索的因子分析を行う前に、形容詞対 29 項目の得点分布を確認して、大きな偏りが認められた項目を除外した。すなわち、それぞれの項目の平均値から標準偏差を加算したときの値が最大値 (5.0) よりも大きければ天井効

表1 原風景についての印象評定項目の因子分析の結果

	因子 I	因子 II	因子 III
因子 I (感情性) $\alpha = .81$			
26. 閉鎖的な－開放的な	.80	.00	-.07
23. うれしい－かなしい	-.79	.33	-.12
27. 小さい－大きい	.58	.00	-.23
15. 無感動な－感動的な	.54	.17	-.29
24. 複雑な－単純な	.53	-.12	.13
17. 広い－狭い	-.52	-.04	.18
21. 緊張した－弛緩した	.51	.36	.14
11. 厳格な－寛容な	.45	.35	.07
因子 II (活動性) $\alpha = .77$			
22. 動的な－静的な	-.22	.70	.03
10. 騒々しい－長閑な	.16	.68	.14
7. 興奮した－沈静した	-.33	.66	.13
13. 激しい－穏やかな	.39	.58	.16
因子 III (鮮明性) $\alpha = .74$			
2. 明確な－曖昧な	.01	.00	.72
4. 濃い－淡い	-.08	.11	.65
29. はっきりした－ぼんやりした	.00	.09	.64
	因子 I	.07	-.13
	因子 II		.32

果とみなし、減算したときの値が最小値(1.0)よりも小さければ床効果とみなして、分析の対象から除外した。除外した項目は全部で6項目であった³。因子分析を行うにあたって、初期解の推定には一般化した最少二乗法を、因子の回転には直接オブリミン法を用いた。因子数は、Kaiser-Guttman基準とスクリープロット基準とを参照して、3因子か4因子が妥当であると判断した。そこで探索的に3因子と4因子とを抽出して、これらのパターン行列などを検討した。4因子の場合だと、0.4以上の因子負荷量をもつ項目が1つしかない因子も確認されたので、3因子解を採用した。3因子解のパターン行列から、因子負荷量が0.4以下の項目と複数の因子に0.4以上の因子負荷量をもつ項目とを除外した。除外の対象となったのは8項目である⁴。これらの項目を除外した後に、三回目の因子分析を行った。

三回目の因子分析で得られた結果は表1のとおりである。KMO測度は0.79であり、

Bartlett の球面性検定では 0.1% 以下の危険率で有意であった ($\chi^2(105) = 1561.92$, $p < .001$)。これらの結果は、因子分析を適用させることの妥当性を保証するものである。因子Ⅰは、「うれしい—かなしい」「無感動な—感動的な」「緊張した—弛緩した」などの 8 つの形容詞対に高く負荷していた。これらの形容詞は、いずれも感情状態に関連するとみなすことができるので、「感情性」の因子と命名した⁵。因子Ⅱは、「動的な—静的な」「騒々しい—長閑な」「興奮した—沈静した」などの 4 つの形容詞対に高く負荷した。これらは、動きや動静に関連した形容詞対に高く負荷していると考えられるので、「活動性」の因子と名づけた。因子Ⅲは、「明確な—曖昧な」「濃い—薄い」「はっきりした—ぼんやりした」の 3 項目に高く負荷している。これらの形容詞対は、原風景を心に浮かべたときの見え方の明瞭さに関連すると考えられたので、「鮮明性」の因子と名づけた。各因子の内的整合性を検討するために、Cronbach の α 係数を算出した。その結果は表 1 に示したとおりで、 $\alpha = 0.74 \sim 0.81$ の範囲であった。各因子の内的整合性は十分であるといえよう。

3.2 各質問項目の平均値と標準偏差

次に、原風景の形成年齢、原風景の心像の鮮明度、原風景の心像の体験様式に対する回答の平均値と標準偏差とを性別ごとに表示した(表 2)。「感動性」「活動性」「鮮明性」の 3 因子についても、因子ごとにそれぞれの項目の得点を加算して平均値と標準偏差とを求めた。なお「感情性」の因子は、因子負荷量が正の値である項目を逆転項目として扱い、高得点であるほど肯定的な感情が強いと見なすようにした。これら 3 因子の結果について、性別ごとに表 2 に示した。

表 2 にみられるように、男性と女性とでは、男性の方が女性よりも原風景の形成年齢が 1 歳ほど高かった。両者の形成年齢を t 検定によって検討したところ、表 2 に示したように 5% 水準で有意差が認められた。なお男女合わせた形成年齢全体の平均値は 7.07 歳

表 2 各質問項目の平均値と標準偏差

	男性(N=158)	女性(N=132)	t 値
原風景の形成年齢	7.43(3.12)	6.65(2.96)	2.15*
心像の鮮明度	3.79(.74)	3.78(.81)	0.10
心像の体験様式	.71(2.66)	1.14(2.57)	1.37
感情性	28.54(6.30)	28.95(5.74)	0.57
活動性	10.62(4.21)	10.61(3.47)	0.03
鮮明性	10.29(2.78)	10.04(3.12)	0.74

() 内は標準偏差

* $p < .05$

表3 自由記述の分析項目ごとの記述の有無（人数）

	記述有り		記述無し		χ^2 値
	男性	女性	男性	女性	
補足的な説明の記述	31	29	127	103	.24
感情の記述					
肯定的感情	67	70	91	62	3.26+
否定的感情	12	12	146	120	.21
両価的感情	8	12	150	120	1.82
行動の記述	93	89	65	43	.13

+ $p < .10$

($SD=3.07$) であり、最大値が17歳で最小値が0歳であった。

原風景の心像の鮮明度は男性も女性もほぼ同じ数値であり、性差は認められなかった。心像の体験様式では、女性の方が男性よりも平均値が高く、観察的心像が優位なようでもあったが、特に有意差は認められなかった。「感情性」「活動性」「鮮明性」の各因子の平均値をみると、男性も女性もほとんど同じ値であることがわかる。実際に、 t 検定を行ったが有意差はなかった。

3.3 原風景についての自由記述の分析

原風景についての自由記述を①補足的な説明の記述の有無、②感情の記述の有無、③行動の記述の有無の3つの観点から分類して、これら分類項目の実数（人数）を表3に示した。②の感情の記述の有無については、肯定的感情、否定的感情、両価的感情の3つに分類した。

表3では、自由記述の各分類項目について、記述の有無を性別ごとに示した。そして、それぞれの項目について、記述の有無と性別とで χ^2 検定を行ったが、肯定的感情以外は特に有意差が認められなかった。すなわち、肯定的感情の記述においてのみ、女性の方が男性よりも記述量が多くなる傾向が認められた。井上（1995）は若年層では、男性は女性よりもネガティブな感情を喚起しやすく、女性は男性よりもポジティブな感情を喚起しやすいと述べている。本研究では、男性の方がネガティブな感情を喚起しやすいという結果は得られなかったが、女性の方がポジティブな感情を喚起しやすいという点では井上（1995）の報告と一致する。

3.4 自由記述の内容と心像体験との関連

前述のように自由記述の内容は、補足的な説明の記述の有無、感情の記述の有無、行動の記述の有無の3つに分類した。心像の鮮明度や心像の体験様式、心像にともなう感情

表4 補足的な説明の記述に対するロジスティック回帰分析の結果

	偏回帰係数	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
				下限	上限
感情性	.02	.44	1.02	.97	1.07
活動性	.00	.92	1.00	.93	1.09
鮮明性	.05	.40	1.05	.94	1.17
心像の体験様式	.16	.01	1.17	1.04	1.32
定数	-2.65	.00	0.07		
モデル χ^2 検定	$\chi^2(4)=9.48$ $p<.05$				
判別的中率	79.2%				

などの心像体験が、自由記述の内容に及ぼす影響を検討するために、ロジスティック回帰分析を試みた。具体的には、3つに分類した自由記述の内容のそれぞれを従属変数として、心像の体験様式、「感情性」「活動性」「鮮明性」の3因子を独立変数とした⁶。

3.4.1 補足的な説明の記述

最初に、原風景についての補足的な説明の記述の有無を従属変数として、強制投入法による多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果を表4に示した。モデル χ^2 検定の結果は5%水準で有意であり($\chi^2(4) = 9.48, p < .05$)、説明変数の中では心像の体験様式だけが有意であった($B = .16, p < .05$)。Hosmer & Lemeshowの検定では、有意確率が90%であり予測精度は良好であると考えられる($\chi^2(8) = 3.47, p = .90$)。判別の中率は79.2%であり、決して低くはない値である。これらの結果から、補足的な説明の記述に参与している要因は心像の体験様式であり、観察的な心像を浮かべていた人ほど、原風景に対して具体的な説明をするようになると考えられる。

3.4.2 感情の記述

次に、原風景に対する感情の記述についてロジスティック回帰分析を試みた。感情の記述の従属変数には、感情の記述無し、肯定的感情、否定的感情、両価的感情の4つがあるので、感情の記述無しを参照カテゴリーとして多項ロジスティック回帰分析を行った。その結果を表5に示した。モデル χ^2 検定では、1%以下の危険率で有意差が認められたが($\chi^2(12) = 118.92, p < .01$)、全体の判別の中率は60.4%と決して高いものではなかった。肯定的感情と否定的感情の記述に関しては、「感情性」の因子の関連が強いことが明らかになった($B = .21, p < .01$; $B = -.25, p < .01$)。しかし、肯定的感情の記述も否定的感情の記述も、他の変数との間には有意な関連が認められなかった。また、両価的感情の記述には、どの変数とも有意な関連がなかった。したがって、肯定的感情か否定的感情が記述される場合には、「感情性」の因子だけが大きく関連しており、心像の体験様式や心像の鮮明度などの要因との間には強い関連はないと考えられる。

表5 感情の記述に対する多項ロジスティック回帰分析の結果

		偏回帰係数	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
					下限	上限
肯定的感情	感情性	.21	.00	1.23	1.15	1.32
	活動性	-.01	.89	.99	.92	1.08
	鮮明性	.01	.86	1.01	.90	1.13
	心像の体験様式	.10	.09	1.10	.99	1.23
	切片	-6.03	.00			
否定的感情	感情性	-.25	.00	.78	.70	.87
	活動性	.02	.81	1.02	.86	1.20
	鮮明性	.11	.30	1.11	.91	1.36
	心像の体験様式	.02	.83	1.02	.84	1.24
	切片	2.88	.05			
両価的感情	感情性	-.01	.87	.99	.91	1.08
	活動性	-.06	.36	.94	.82	1.08
	鮮明性	.14	.15	1.15	.95	1.38
	心像の体験様式	.07	.44	1.08	.89	1.30
	切片	-2.26	.15			
モデル χ^2 検定		$\chi^2(12)=118.92$		$p<.01$		
判別の中率		60.4%				

3.4.3 行動の記述

最後に行動の記述の有無を従属変数にして、多重ロジスティック回帰分析を行った。その分析結果は表6に示したとおりである。モデル χ^2 検定の結果は1%以下の危険率で有意差が確認された ($\chi^2(4) = 24.97, p<.01$)。Hosmer & Lemeshow の検定では、有意

表6 行動の記述に対するロジスティック回帰分析の結果

	偏回帰係数	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
				下限	上限
感情性	-.01	.64	.99	.95	1.03
活動性	.14	.00	1.15	1.06	1.24
鮮明性	.02	.62	1.02	.93	1.13
心像の体験様式	-.11	.03	.90	.82	.99
定数	-.74	.34	.48		
モデル χ^2 検定		$\chi^2(4)=24.97$		$p<.01$	
判別の中率		64.6%			

確率が70%であり予測精度は良好であると考えられる ($\chi^2(8) = 5.55, p=.70$)。しかし、判別の中率は64.6%と必ずしも高いとはいえない。説明変数の中では、「活動性」の因子と心像の体験様式とが有意であり ($B = .14, p<.01; B = -.11, p<.05$)、これらの変数が行動の記述に影響を与えると考えられる。すなわち、行動の記述がなされるためには「活動性」の高い心像が喚起されることも重要であるが、さらに経験的心像が優位であると記述されやすくなるといえる。

4 考察

4.1 原風景の形成年齢

長谷川・星野(1982)によれば、大学生の原風景の89%が8歳までに形成され、65%は5歳までに形成される⁷。原風景の形成年齢が9歳以上の割合は5%と少ない。この結果は、大学生の原風景の約9割は、思春期以前に形成されることを示している。井上(1995)は、平均年齢が約20歳の若年層と約50歳の中高年層とで原風景の形成年齢を比較した。その結果、若年層の形成年齢の平均は11.3歳で、中高年層は15.7歳であった。この若年層の形成年齢は、長谷川・星野(1982)の結果よりもかなり高いと考えられる。

本研究の形成年齢の平均は、男性が約7.4歳で、女性が約6.7歳であった。男性の方が有意に高かった(表2を参照)。また、形成年齢の内訳は5歳までが37.8%(109名)で、8歳までになると59.0%(193名)に増え、11歳までが89.6%(258名)であった⁸。したがって本研究の調査協力者の形成年齢は、9割が8歳までに形成されると報告した長谷川・星野(1982)よりも高く、平均年齢を11.3歳と報告した井上(1995)よりも低いといえる。さらに本研究では、10%(29名)が原風景の形成年齢を12歳以降と回答した。13歳以降になると、さらに減少して3.1%(9名)になる。大学生では、中学生以降の年齢で原風景が形成されることは非常に少ないと考えられる。

ここで注意すべきことは、本研究では前述のように「子どものころに見て、今でも印象に残っている風景を思い浮かべてみてください」という教示を与えている。長谷川・星野(1982)では、「あなたが思い出すことのできるもっとも幼いときの記憶は、どんなのですか」と質問している。本研究では単に「子どもころ」の風景を尋ねているのだが、長谷川・星野(1982)では「もっとも幼いときの記憶」を聞いているのである。長谷川・星野(1982)の報告した形成年齢が本研究よりもかなり低いのは、教示(質問)の違いによる可能性が十分に考えられる。井上(1995)の形成年齢がかなり高めであったのも、教示(質問)による影響の可能性が推測される⁹。原風景の形成年齢を検討するためには、教示(質問)の仕方に注意する必要があるといえる。

さらに、本調査で形成年齢が13歳以降とされた自由記述の内容を検討した。その結果、

「中学生のころの夏休み、年一回の家族旅行でディズニーランドに行くことがあった。その日が近づくにつれてとてもワクワクしており、当日になれば早起きし（略）存分に遊ぶことを満喫した。（略）今おもい返すと、とても印象に残っている思い出です」という回答がみられた。また、「高校の3年生の夏。野球部最後の夏の大会（略）逆転勝利した風景。感動した」や「自分の失敗、失言、軽率な行動をしてしまった時の風景が浮かぶ。（略）」という回答もあり、その他にもこれらと類似した回答が散見された。これらの回答は、個人的なエピソード記憶ではあるが原風景とは異なるとも考えられる。少なくとも、場面（scene）ではあるが風景（scenery, landscape）とはいえず、調査の目的や質問の意味が正確に理解されていると考えるのは難しい¹⁰。

したがって、これらの回答は、調査協力者の誤解や思い違いに基づいている可能性が考えられる。大学生の原風景の形成年齢が中学生以降である場合には、その内容を慎重に検討することが必要であろう。場合によっては、何らかの一定の基準を設けて除外する必要があるとも考えられる。しかし、単なるエピソード記憶と原風景とを明確に区別することは困難であると思われるので、このような回答に対する扱いについては十分な検討が必要であるといえよう。

4.2 SD法による原風景の印象評定

原風景の印象についてSD法による評定を求めた結果、本研究では3因子を抽出した。この3因子とは、「感情性」「活動性」「鮮明性」である。星野・長谷川（1985）は短期大学生1448名にFD法を適用して、「明朗・爽快感」「力動感」「安静感」の3因子を抽出した。両研究とも3因子構造であったが、星野・長谷川の「安静感」と本研究の「活動性」とを除けば、他の因子は共通性があるとは言い難い。つまり、因子の項目内容がかなり異なっている¹¹。原風景の因子構造に関する研究はまだ十分に行われていないので、今後は項目を慎重に選定したうえで、多数のデータを蓄積する必要があるだろう。

4.3 心像体験が自由記述の内容に及ぼす影響

呉（2001）は原風景についてのインタビューから、原風景の語りの内容を「風景としての語り」「出来事としての語り」「評価としての語り」の3種類に分類した。本研究もこの分類に準じて、自由記述の内容の分類を試みた。「風景としての語り」は本研究の「補足的な説明の記述の有無」に対応し、「出来事としての語り」は「行動の記述の有無」に対応するとも考えられる。しかし、「評価としての語り」に対応するカテゴリーを作ることはできなかった。

「評価としての語り」では、原風景の内容について総合的評価や意味づけをしながら、語り手の価値観や思想が語られる（呉，2001）。インタビューでは、このような語りを得

られることも少なくなかったようであるが、本研究では1例しか得られなかった¹²。樋口(2000)は、大学生にとっては原風景の心理的な意味がまだ明確にされておらず、原風景の意味について記述を求めても、約半数の学生が無回答であったと報告している。大学生を対象にした自由記述による調査では、原風景に関する評価や意味づけは得られにくく、それは質問紙調査研究の限界であるともいえよう。

「補足的な説明の記述の有無」は、原風景の内容についての補足的な説明が認められる記述である。思い浮かべた原風景を客観的に記述しようとする態度が反映されていると考えられる。多重ロジスティック回帰分析の結果からは、心像の体験様式が強く関与していることが明らかにされた。つまり、原風景が観察的心像で体験されたときほど、原風景に関する補足的な説明が記述されやすくなることを示している。

「感情の記述の有無」は、前述のように3種類の感情に分けられるので、感情の記述無しを参照カテゴリーとして多項ロジスティック回帰分析を行った。肯定的感情と否定的感情とでは「感情性」の因子だけが強く関連していたが、両価的感情では有意な関連のある変数は一つもなかった。肯定的感情では「感情性」の因子の偏回帰係数が正の値であることから、原風景を心像化したときに肯定的な感情が高まると、肯定的感情が記述されやすくなるといえる。同様に、否定的感情では「感情性」の因子の偏回帰係数が負の値であった。この結果は、原風景にともなって否定的感情が高まると、否定的感情が記述されやすくなることを示している。そして「感情の記述の有無」に関しては、心像の体験様式の影響は大きくないと考えられる。一般的には、経験的心像は観察的心像よりも身体感覚や感情を伴った心像体験であると考えられているが(田嶋, 1987)、原風景についての自由記述を分析した限りでは、経験的心像が優位であるほど感情が記述されやすくなるわけではないといえよう。

「行動の記述の有無」では、多重ロジスティック回帰分析を適用することによって、「活動性」の因子と心像の体験様式とが強く関連していることを明らかにした。原風景の中の行動(活動)は、経験的心像が優位なときほど記述されやすくなるといえる。行動の記述は、経験的心像と強く関連しているのである。経験的心像は身体を巻き込み、身体感覚と深くつながった心像体験である(田嶋, 1987)。原風景の中で行動している場面を経験的に心像化することは、視覚心像だけではなく運動心像をも活性化させる。そして、心像化に伴う身体感覚の生起が、行動に関する自由記述を促進すると推測される。

以上のように、原風景に関する自由記述の分析では、心像の体験様式については、次のような傾向があると結論できる。すなわち、原風景に関する説明的な記述は観察的心像が関連しており、行動の記述は経験的心像が関与している。呉(2001)によれば、「風景回想タイプ」「行為叙述タイプ」「説明演説タイプ」は経験的心像と類似しており、「事実説明タイプ」と「評価意味づけタイプ」は観察的心像と類似している。つまり、風景を回想す

るときや風景の中での行為を語るときは、より心像場面の中に没入して視覚心像と自己との体験距離が減少している経験的心像の状態に近い。本研究の「補足的な説明の記述の有無」は呉（2001）の「風景回想タイプ」と、また「行為の記述の有無」は「行為叙述タイプ」と類似したものと考えられる。しかし、本研究では「補足的な説明の記述の有無」は観察的心像との関連が強く、「行為の記述の有無」は経験的心像との関連が強いことが実証された。

これらの違いは、方法論の違いによっても考えられる。呉（2001）の研究はインタビューによるもので、本研究は自由記述による。インタビューでは、調査協力者がその場で風景を心像化して、それをそのまま言語化したデータが分析の対象となる。自由記述の場合は、心像化した風景をそのまま言語化すればよいというわけではない。心像を文章化して、紙面に書き著さなければならない。つまり自由記述では、文章化という知的作業と書字という身体動作とをとともなう。調査協力者の文章表現力も強く影響するであろう。したがって、自由記述によるデータには、調査協力者の心像体験がどこまで正確に反映されているのかという疑問が残る。自由記述によるデータを分析するにあたっては、このような方法論上の問題を踏まえておく必要があるだろう。

また本研究では、自由記述の内容には「鮮明性」の因子がまったく関与していないという結果が得られた。この場合の「鮮明性」の因子は、原風景の心像の鮮明度を表している。したがって、鮮明な心像が喚起されていても、それが原風景の説明的記述や感情の記述、行為の記述にはほとんど影響を及ぼさないことを示している。しかし、これも自由記述によるデータから得られた結論である。調査協力者が鮮明な心像を喚起していても、それを文章化することができなかつた可能性も考えられるので、インタビューによる言語データの分析を行うことも必要であろう。

特に臨床心理学の実践の場では、心像体験は自由記述によってではなく、「語り」をとおして報告される。原風景の心像を利用した臨床心理学的な研究を行ううえでも、インタビューによる言語データを分析は重要である。長谷川・星野（1982）や樋口（2007）が試みたような、原風景に対する臨床心理学的なアプローチも今後の研究法として期待されよう。

5. 文献

呉 宣児・南 博文，“原風景研究の動向と展望”，『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』，43 卷，2 号，1998，Pp. 125-140.

呉 宣児，『語りからみる原風景—心理学からのアプローチ—』，東京，萌文社，2001.

長谷川浩一，『心像の鮮明性尺度の作成に関する研究』，東京，風間書房，1993.

- 長谷川浩一・星野 命, “幼少期の原風景としての風土— (第2報) 原風景の心理的測定法の検討—”, 『人類科学』, 35 卷, 1982, Pp. 105-134.
- 長谷川浩一・星野 命, “沿岸居住者の心理—幼少期の原風景の検討—”, 『人類科学』, 37 卷, 1984, Pp. 149-166.
- 樋口勝也, “大学生の内面生活—「喜び体験」と「原風景」の描画の分析から—” 『プール学院大学研究紀要』, 40 卷, 2000, Pp. 137-156.
- 樋口勝也, “原風景研究の臨床心理学への示唆”, 『追手門学院大学心理学部紀要』, 1 卷, 2007, Pp. 207-231.
- 星野 命・長谷川浩一, “幼少期の原風景としての風土 序報: その心理的意味とパターン”, 『人類科学』, 34 卷, 1981, Pp. 45-75.
- 星野 命・長谷川浩一, “幼少期の原風景としての風土— (第3報) 恐怖・不安のイメージ—”, 『人類科学』, 36 卷, 1983, Pp. 149-166.
- 星野 命・長谷川浩一, “沿岸居住者の海・船に対する心理構造—イメージと危険への態度—” 『人類科学』, 38 卷, 1985, Pp. 51-70.
- 池田豊應, 『人間学的心理学』, 京都府, ナカニシヤ出版, 2001.
- 井上佳朗, “原風景の心理学的研究”, 『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』, 41 卷, 1995, Pp. 27-68.
- 小泉晋一, “心像の体験様式が原風景の自由記述の内容に及ぼす影響”, 『日本心理学会第78回大会論文集』, 2014, P. 372.
- 奥野健男, 『文学における原風景』, 東京, 集英社, 1972.
- 杉浦 健, “自己イメージの内的・外的視点に対する自己意識の影響について”, 『心理学研究』, 66 卷, 1996, Pp. 418-424.
- 田嶋誠一, “壺イメージの経験から”, 『壺イメージ療法—その生い立ちと事例研究—』, 田嶋誠一 (編), 大阪府, 創元社, 1987, Pp. 120-146.

- 1 田嶋（1987）は観察的心像—経験的心像という言葉ではなく、観察的イメージ—体験的イメージという言葉を使っている。心像の体験様式には、観察的自己イメージ—経験的自己イメージや外的視点イメージ—内的視点イメージなどのさまざまな呼称がある。呼称は異なるが、いずれも概念的にはほぼ類似のものを指していると考えられる。すなわち、前者が自分自身を傍観者的に眺めているような視覚心像優位の心像体験であるのに対して、後者は心像の中に没入して実際に体験しているような身体感覚をともなった多感覚様相的な心像体験である。本研究では、このような心像の体験様式を観察的心像—経験的心像と表記する。
- 2 最初の例では「森の中で遊ぶ」という能動的な行動が記述されているが、次の例では「眺める」という受動的な（積極的行為を伴わない）行動が記述されている。行動の記述を能動的行動と受動的行動とに分けることも可能であろうが、本研究では両者を分離せずに、どちらも行動の記述として扱った。
- 3 除外した項目は「1. 明るい—暗い」（ $M=3.82, SD=1.25$ ）、「3. やさしい—おそろしい」（ $M=4.00, SD=1.07$ ）、「6. 安心な—不安な」（ $M=3.83, SD=1.20$ ）、「8. たのしい—くるしい」（ $M=3.93, SD=1.12$ ）、「9. なつかしい—うとましい」（ $M=4.45, SD=.93$ ）、「12. あたたかい—冷たい」（ $M=3.93, SD=1.16$ ）の6項目である。
- 4 2回目の因子分析で除外した項目は、「5. 受動的な—能動的な」「14. 重厚な—軽薄な」「16. 弱気な—強気な」「18. 世俗的な—脱俗的な」「19. ありふれた—めずらしい」「20. 豪華な—質素な」「25. 近い—遠い」「28. 主観的な—客観的な」の8項目である。
- 5 本論文は、日本心理学会第78回大会（2014年、同志社大学）で発表した研究をまとめたものである。学会発表では、因子Iを構成する項目の数は8つではなく11であるとした（小泉，2014）。学会発表時の結果と本論文の結果とが異なるのは、学会発表時には、得点分布の偏りが大きい項目を除外しなかったからである。つまり、本論文では23項目だけに因子分析を行ったが、学会発表時には29項目すべてに因子分析を行った。因子Iの項目数が異なるために、これ以外の分析結果も本論文とは異なる。
- 6 調査協力者は原風景の心像の鮮明度を5件法によって評定したが、本研究では分析の対象にしなかった。それは心像の鮮明度と、SD法による印象評定の因子分析から得られた「鮮明性」の因子との間に、比較的高い相関があったからである（ $r = .52, p < .01$ ）。また、心像の鮮明度を印象評定の15項目の中に加えて因子分析を行うと、「活動性」の因子に高く負荷するからである（因子負荷量は0.66）。なお、心像の鮮明度と心像の体験様式との間には、有意な相関は認められなかった（ $r = .09, n.s.$ ）。
- 7 長谷川・星野（1982）の調査協力者は269名で、その中で原風景の形成年齢が不明な者は15名（6%）である。この15名を母数から除外すれば（つまり調査協力者を269名でなく、254名として計算すれば）、原風景が8歳までに形成される割合は95%（241名）となり、5歳までに形成される割合は69%（176名）になる。
- 8 調査協力者の中で2名が原風景の形成年齢を記載しなかった。この2名は除外するので、百分率は290名ではなく、288名を母数として求めたものである。
- 9 井上（1995）の論文では、どのような質問がなされたのかは明記されていない。原風景の形成年齢を検討する際には、どのような質問を用意したかで結果が異なってくると考えられる。今後の研究では十分に留意する必要があるだろう。
- 10 20歳前後の大学生にとって、中学生や高校生の時期は数年前のことである。彼らが、この時期の出来事を子どものころの思い出とみなすとは考えにくい。そのために、「子どものころに見て、今でも印象に残っている風景」という質問に対して、高校生のころの思い出などが回答されるのは、調査目的や質問内容が正しく理解されているとは言い難いのである。インタビューであれば、質問内容を説明し直して、もう一度、質問をすることになるであろう。
- 11 星野・長谷川（1985）の第I因子「明朗・爽快感」には、「なつかしい」「明るい」「楽

しい」「安心な」などの項目が高く負荷している。しかし本研究では、これらの項目には天井効果や床効果が認められたので、因子分析を行う前にすべて除外した。星野・長谷川と本研究とで、因子間に類似性が認められないのはそのためであると考えられる。

- 12 「評価についての語り」に対応する唯一の回答では、「悲しい時など（略）昔のことを思い出します。とても幸せな気分になれるからです。（略）の光景を思い浮かべるのは、常にこころの中にあるからだと思います。思い出した時、私はとても幸せな気分になります」と記述されている。落ち込んだ時などに原風景を思い浮かべることによって、元気づけられる様子がかがわれる。